観察者と保育者の対話 (2)

「子どもの能動性を守り育てる保育」を観る・語る

観察者から保育者へ

観察者・Y・S（お茶の水女子大学）

いずみナーサリーは、〇～二歳の子どもたちが十数名通っている小さな保育所である。

ここに時折、観察者として参加している私に、このところ見えてきたのは、子どもの能動性を守り育てる保育場面の数々である。子どもの「自発性」「自主性」「主体性」という言葉で語るより、子どもの「能動性」が見え隠れすると言ったほうがふさわしい、そんな保育の場である。

「能動性」とは、「受動性」の対になっている言葉である。いずみナーサリーでは、子ども同士の言葉以前のやりとりが頻繁に繰り返され、またもちろん子どもと保育者の間でも、多様なやりとりが積み重ねられている。子どもの生活を流れに沿って見ていくと、この「能動性」と「受動性」の間を行ったり来たりしながら過ごしていることが見えてくる。

一人ひとりの子どもの心にある願いが実現されるよう手助けしていくと、保育者の側に矛盾が生じることもある。それでも、可能な限り子どもの能動性を守っていこうとする保育者の熱意と努力を、記録を通して見ていきたいと思う。ここで登場する保育者は、二年目の若手の

保育士、Kさんである。Kさんは、ナーサリーの中では大きい組の子どもたち六名を主に担当している。

《観察記録1》

おやつを終えたA（二歳四か月女児）が、保育士Kの所に来て、「行っちゃうよ。行っちゃうよ」と言っている。保育士Kが「行かないでよ」と言うと、また「行っちゃうよ」と言って離れていこうとする。保育士Kが他児をひざに抱いていたために後を追えないでいると、振り返って「行っちゃうよ」と言ってから離れていく。

Aは他の保育士としばらく過ごしたあと、穴の空いた直方体の積み木を手に戻ってきて、保育士Kの後ろに回る。二～三メートル離れた所から「写すよ」と言う。保育士Kが「はーい」と振り返ってポーズをとると、「こっちかな、こっちかな」と言いながらカメラに見立てた積み木を、縦にしたり横にしたりして調整する。保育士Kが「Aちゃん、とれた？」と聞くと、Aはそのカメラを顔にあてたままうなずいている。

のびやかに流れていくような保育の一場面である。

女児Aは、「行っちゃうよ」と言い放ってKさんを置き去りにする。この時Kさんは、離れていくAを見送ることしかできない、そんな受動性が活かされているのである。しかし、この関係がAを生き生きとさせ、Kさんとの距離を自ら感じつつ自在に動くことを可能にしていたように思う。幼い子どもが保育者との関係を土台にしながら世界を広げていこうとする、その姿がくっきりと浮かび上がる。

《観察記録2》

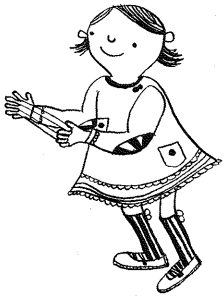
お散歩の時間。十五分ほど歩いて広場に着く。皆が三々五々に散ったりくっついたりして思い思いに過ごす。Aは、ひとりでベンチにいたが、急に大きな声で「Kさーん、ちょっとまってー」と言って、走りだす。その時保育士Kは十メートルくらい離れた所に他児と共にいる。保育士KはAの声を聞くと振り返り、「ちょっとまってるよー」と手を振る。Aは、保育士Kをめがけて走っていく。

しばらくして、Aは、再びベンチにいて、木の葉を集めて一人でままごとを続けている。「ごはんできたよー」と辺りに散っている子どもたちを大きな声で呼ぶ。保育士たちはすかさず「はーい」と返事をする。子どもたちは、吸い寄せられるようにAのいるベンチに走り寄る。そして、Aの用意した「やきそば」を皆で囲んでいる。

広場からの帰り道。保育士KとB（一歳十か月女児）が手をつなぎ、その先にAがつながっている。Bが小さな声で歌い始めたのを受けて、保育士Kが続きを歌いながら足を大きく動かすと、つながっている二人も足をバタバタさせながらうれしそうに歩く。

この日女児Aは、登所が遅れる。お散歩に行こうと皆が門の前に出たところにやって来る。皆の様子を見てAは泣きだし、母親にしがみつく。Kさんは連れていた子どもたちを他の保育士たちに委ね、Aと母親と一緒に門の前に残る。そして少し落ち着くのを待って母親からAを受け取り、お散歩への合流を遂げる。その直後の様子が《観察記録2》である。

母親から引き取られた時のAは、Kさんに身を任せた幼子の風情であるが、広場に導かれそこで遊び始めたAは、Kさんから離れてひとりで堂々とままごと遊びを展開させ、皆を巻き込んでいくほどのエネルギーを発揮した。そして、帰り道には、AはKさんとつないでいた手を自ら離して間にBを入れて歩いた。Kさんとのつながりの中に友達を入れるという余裕すら見せてくれたのは、この日が初めてであったという。



母親から離れがたく自ら歩み出す力が乏しいとき、子どもは保育者に対して依存的になることがある。その子どもの受動性がありのままに受け止められると、子どもは安心して自ら動き出す力を蓄えることができる。そして、いったん動き始めると、もはや保育者の支えを必要とせず、時折、所在を確認するだけで子どもは遊び続け

ることができる。

保育者が子どもの必要を満たしつつ子ども自身の能動性が開かれていくのを見守る保育が、ここに展開されていたといえよう。

保育者から観察者へ

保育者：A・K（お茶の水女子大学附属いずみナーサリー）

記録を拝見すると、今まで女児Aと私との関係を築いていくことで、Aが世界を広げていけたことを実感し、とてもうれしく思う。

今回の記録以前のAは、友達の腕が触れ合うくらい近くにあると、「うえーん！」と大泣きして怖い気持ちを訴えるか、相手を突き飛ばしてしまうことがあった。思い返してみれば、このころは、Aが「K…さん」と言うたびに、「はーい」と私がにっこり答える繰り返しを楽しんでいた。私との関係を確認することで、Aが友達との世界へ飛び込むための準備をしていたのだなと改めてとらえることができた。

近ごろのAは、自分から友達に顔を近づけては、「一緒に遊ぼう」と誘うほどに、友達との距離を自ら縮めることを楽しんでいるようである。それとほぼ同時に、私から少し遠い所に自分を置き、「担任がそばにいなくても自由自在に動く自分」を確認するかのように、「行っちゃうよ」と言っては、私の前からいなくなることを、毎日行うようになった。

「行っちゃうよ」と言って、しばらく私の目をじっと見つめるAからは、「そばにはいなくてもいいけど、困ったときにはちゃんと助けてね」と言われているような気がしている。

今後、Aがもう一歩世界を広げようとする中で、担任の私との関係をもう一度確認するために、寄り添ってほしい、そばにいてほしいと思ったときには、充分に応える保育者でありたいと、改めて思った。